

亀井勝一郎

倉田百三



倉  
田  
百  
三



——病氣論——

倉田氏の全著作を通して、私のいつも興味ふかく思う点は、病氣のときに傑作をかき、健康なときには却って創作力と思索力が衰えたという一事である。ここで謂う健康とは肉体的な意味であるが、それは氏にとって、求道心の内面化を、或は芸術的表現における繊細な感覚を、無意識裡に妨げる危険な徴候であつたらしい。古典人な

らば、むろんこれを正常でないと言うであらう。

しかし、病気という強いられた運命を逆用して、病気なるが故に「健康」であつたという逆説を生きたところに、特異性があつたように思われる。ここで謂う「健康」とは、第二の肉体としての作品の健康さである。精神的エネルギーは、常にかかる逆用転換によって発揮されると云つてよい。云うならば氏にとって、肉体の不幸が作品の幸福を約束したのである。

仮りに青年期から壮年期に及ぶ十数年間のあの長い闘病生活がなかつたならばと考えてみよう。理想主義的で

はあるが拙劣な政治家として、乃至は善良ではあるが通俗的な宗教作家として終ったのではなからうか。私はふとこんな危惧をもつのだ。所謂「健康なとき」の作品と行動をみた上での、これは推測にすぎないが、氏自身はむろん反対の想像をいだいていたであろう。肉体の恢復は、氏が求めようとして長いあいだ求められなかった激しい夢であつたにちがいないのだ。その苦衷の裡に夢見たものは、云うまでもなく第二の肉体の創造、即ち作品であつた。甚しいエネルギーの消耗である病気が、消耗を制作の方に転換するに役立った。この秘密はどこにあ

るのだろうか。

青年期の病床から生れた、「出家とその弟子」は、驚くべき逞しい作品である。九十歳の親鸞の中に氏は己の青春を託した。青年らしい感傷性はあるが、病的なところは少しもない。明治以後にあらわれた青春の文学として、これほど長命のものはない。すでに古典である。あらゆる時代の青年によって読みつづけられてきた。そしてこの作品の長命が氏自身の生涯を蔽い、云わば作家が作品の傀儡となった感がある。これは氏にとって幸福であつたか、不幸であつたか。

作品とは作家の原因であると云われるのはほんとうだ。爾後の倉田氏の現身とは、要するに「出家とその弟子」の生んだ継続であり、第二の肉体の生んだ第一の肉体、云わば残骸と云っていい。すべての作家は、一作品の完成の後においては残骸にすぎない。荒蕪こうぶの土地となる。むろん作家は不死鳥である。荒蕪の地の再生もある。しかし氏は生涯、「出家とその弟子」に匹敵する作品はかかなかった。結果としてみれば、それが健康の恢復という無上の歓喜であったところに、作家としての悲劇があったように思われる。

\*

健康で元気のいい時の倉田氏と、病床に痩せ衰えてい  
るときの倉田氏と、二つの面影を私はいま思い出してい  
る。晩年、最後の病床に臥す以前、ちようど大陸へ赴<sub>おもむ</sub>  
かれる前の数年間は、健康という点では生涯の中でも最  
も恵まれた時代ではなかったかと思う。血色もよく、体  
軀もがっちりして、長いあいだ不治の病にあった人とは  
どうしてもみえなかつた。その頃は所謂日本主義の政治

団体にも関係されていた様子で、一切の政治に疑惑する私に対して、「君は僕を誤解している」と屢々しばしば弁明された。私はそういう氏に対して危惧と反感を抱いていたのである。健康であることが、何かしら近よりがたい感じを与えたのである。

私の氏を見る眼は、「出家とその弟子」から「絶対的  
生活」に至る道によって養われたものだ。これらの作品  
と思索こそ、私にとっては倉田百三のすべてであった。  
政治的談論を試み、また多くの凡作を発表する氏をみな  
がら、そこに残骸をみる思いをしたのは事実である。氏

の「政治慾」とは、過去の名作から生じた名声の惰性のようなものではないか。後半生の作品とは、前半生の作品の亡霊ではないか。こうした感慨を免れなかつたことをここに述べておきたい。むろん氏はつよく反対したであらう。しかしその信念がいかに清浄なものであるとも、私はその人よりも、その人の原因たる作品を重んじたのである。何故なら、私にとってそれは文学的礼節であつたから。

倉田氏は、元来生活意慾の多面的な旺盛な人であり、煩惱深い人である。健康なときは好酒好色であつたよう

で、これは屢々私へも洩らされたところである。それが作品の滋養分として、或は信仰の土壤として、適当に醗酵するためには、氏の場合には肉体の腐敗が必須の条件であつたように思われてならない。

大陸旅行中に病が再発し、帰って入院してからは再び起つことは出来なかつた。運命は、適当なときに氏を病床へ導いたようである。臨終の日近いその面影について、私は嘗て次のようにしるしたことがある。

「或る日大井のお宅にお見舞にうかがつた。先生は樹木の緑が蔭を濃く宿しているベッドの上に仰臥されてい

た。訪れる人は一人もなかった。頭髪も顎鬚ものび放題にして、それが驚くほど白かった。いつの間にかこんなに白髪になられたのか。全く見ちがえるような白髪と白い髪を蓬々とのばした先生が、そこに横たわっておられたのである。非常に衰弱されてはいたが、病人らしいところには少しもなかった。その風貌には明らかに聖者の相があらわれていた。先生は仰向いたままちよつと微笑し、  
稍ややかすれた低い声で、『亀井、浄土はあるか』と仰言  
った。

僕は内心いささか狼狽しつつ、黙って傍に立っていた。

先生は断続的な声で、『わしが瞑目した刹那、莊嚴な浄土がほんとうに眼前にあらわれるだろうか。死とともに浄土が浮び出てきてわしを包むならば……。近頃は浄土のことをよく考える……。』そういつて、爪ののびた痩せ細った手を少し胸の上にもちあげ、虚空に何か描くように、或は眼前に何かを探すように、ゆっくり動かしながら、やはり微笑しておられた。」

このときほど作品とその作者の姿が、ぴたりと一致してみえたことはなかったと思う。肉体的に云えば、このときの氏はすでに滅びる直前にあったのだが、この「残

骸」の裡にはあきらかに不死鳥の羽ばたきが聞えたのである。生々とした何ものかが生れる予感が、その胎動が、感ぜられたのである。晩年の病床は、最後の醗酵状態であつたと思う。健康な氏の裡に亡霊をみ、病める氏の裡に新しいいのちをみることは、私の感傷であつたらうか。

\*

精神を、精神として形成し存続せしむるもの、それは自主的な内面の苦悩であるにちがいない。漠々たる不安

の情、知性の発する際限のない疑惑、人は何かを求むることによってみずから苦悩におちいり、苦悩によって精神の中樞神経ともいうべき意志を形成する。自然に対する反逆意志を。これが人間を動物から別れしむる根拠なのだが、もしそうならば、人間は傷つくことによって人間になると云ってもいいのではなからうか。自然からみたとき、精神とはおそらく一の負傷現象かも知れない。苦悩とは精神が病むことだ。むしろ精神そのものが一の病める現象だと云っていいかも知れない。ニイチエは人間は病める動物だと言った。

しかしこのことは、何も肉体の不健康を条件とするものではない。古典的ギリシヤ人は、いかに苦悩する場合でも、自然との間に或る均衡は失わなかつたと云われる。云わば健康肉体が、病める精神を支え、その病めることを過不足なく全からしめることによつて、その負傷を自然へ歸したのである。換言すれば病むことにおいて感傷的となつたり、自意識の過剰におちいつたりすることはなかつた。

自意識の放下は、仏説においてもまた中心の課題である。ところが近代精神は、精神という病める現象をいさ

さか誇張した感がある。肉体上の不健康が、精神を精神たらしむる大きな条件であるかのような感を与えた。またそれを実証した詩人哲人も多い。自然からの乖離に基くこの観念の過多を、たとえば十八世紀的ゲエテは嫌悪したのである。「古典的なるものを健康なものと呼び、浪漫的なるものを病的なものと呼ぶ」と。近代人は浪漫的たることによつて精神を自覚したともいえるが、その背後には、たしかに自然の大きい喪失があつた。自然を征服しただけ、それだけ自然を失つたのだ。この喪失感にはゲエテといえども免れてはいない。

\*

病氣と創作の關係について、倉田氏は大きな秘密を提  
供した人である。私は實際問題として考えるのだが、た  
とえば高熱や危篤の状態のとき、人はもはや考える能力  
もなく表現の術もない。しかし小康が持続し、恢復しき  
れないが、恢復への希望がもたれるか、乃至は病氣の進  
行の緩慢なとき、云わば適度の病状にあっては、人は健  
康な折よりも考える時間をより多くもつであろう。精神

は内面化の機会を与えられる。この意味で、それほど悪化しない程度の不治性の結核のごときは、精神のために好都合であるかもしれない。或は何となく身体が弱く、また筋肉労働に堪えぬような肉体も、好都合となる。肉体のこの微妙な条件を、倉田氏は巧みに運用したのだ。闘病によって育かれた意志を、そのまま求道意志に転換し、肉体の病をそのまま精神現象たらしめた「手腕」を氏は病床において体得したといえる。

私は作家や思想家の健康状態を注意ぶかく眺めると、いつも次のような現象にぶつかる。未だ病氣らしい病氣

をしたことのない人であっても、決して健康とはいえぬという事実を。これはその職業の性質から、労働筋肉やスポーツ神経が退化したのだとも思えるが、それだけではなさそうだ。もし彼等の健康状態を一口で云うならば、「健康にもあらず、不健康にもあらず」と云えるように思う。

親鸞は、自分のことを、「僧にもあらず俗にもあらず」と云った。それは彼の新しい宗教的創造の母胎を告げる微妙な位置にちがいがいなかっただのである。精神をその微妙な位置に存続せしむるためには、全き健康も瀕死の状態

も、ともに不適當なではなからうか。何かしら適度に病んでいる状態が、肉体にも反映し、肉体そのものを微妙ならしむるのではなからうか。これは職業的な特殊なエネルギーの問題であるかもしれない。アンドレエフは、「病める貝殻にのみ真珠は生れる」と言っているが、芸術や宗教の醗酵を促すためには、一種の腐敗状態が必要なのではなからうか。

倉田氏は、幸いにいして病気であつた。生命の危機感と、罪の意識と、病の自覚は、すでに述べたように発心の三大動機である。罪人が信仰にめざむること早いように、

病者もまた早いであろう。この早さは、むろん信仰の完璧を意味しない。信仰の完璧ということ自身ありうべからざるところである。だが信仰に対して敏感になるのは事実だ。換言すれば、新しい生命、再生への意志の素早い喚起である。

病気をしたことの無い人間が健康なのではない。病気をして、それを克服した人が健康なのである。健康とは抵抗と克服の証なのだ。人間は適当に病気にして、抵抗要素を体内に蓄積すべきかもしれぬ。これは一切の精神にあてはまると思う。精神とは抵抗と克服の意志だからだ。

所謂小児的意味の「純粹さ」とは、知性にとって危険な代物である。純粹は不純粹との格闘の裡に生ずる。子供は純粹でない。悪を知らぬ人は、善を知るまい。煩惱に苦しまぬものは、涅槃を願うまい。倉田氏は、病氣という強いられた運命の中にあつて、人間の遭遇すべき運命の根本を啓示したといえる。菩薩とは、病む人を謂う。衆生病む故に我も病むというのが菩薩の慈悲である。

\*

倉田氏を最も苦しめたのは、だが克服の自意識そのものであった。青年時代から病床にあって、早く求道心のめざめたことは肯けるのであるが、その潔癖な至純な求道的努力が、氏にとっては遂に強迫観念となった。宗教人としての氏を決定したものはこの病気であったと云える。自己の「当為癖」について屢々語っているが、精神の或る高所をめざして、氏は己を苛酷に鞭うち、性急に潔癖にそこへ達しようとして企てた。この執着のはげしさが、頑固な不眠症をもたらし、一種の神経衰弱の症状を呈したのであるが、氏はこれを神経衰弱とはみなさぬ。我執

着からくる一種の宗教病とみなしてこれと戦ったのである。

「強迫観念成立は意識の執着である。一と口に執着と云っても実際はなかなか複雑であつて、たとえば、執着すまじと執着することも亦一つの執着である。執着せず、執着すまじ、ともに執しないことである。その他は悉く執着である。」

これが氏の病気の基本的なテーマである。この執着が人を眠らせない。眠ろうと焦る程眠あせられない。「絶対的  
生活」や「生活と一枚の宗教」は、「出家とその弟子」

「愛と認識との出発」以後、中年期の氏を代表する宗教的  
名作であるが、それが名作である所以は、この病的現象を精神の普遍的な問題に昂たかめたところにある。眠られなければ眠られぬままに、強迫観念のままに、云わばその地獄に身を委ねきつて、捨身の状態に安んじたとき、はじめて深い眠りが訪れたという。病身の苦しさにあつて、治らねばならぬと焦る意志そのものを放下したとき、云わば忘却のうちに、治らずして治ったという闘病の経験の上に、氏の宗教は成立したのである。

云ってみれば簡単なことだ。しかし自然から限りなく

乖離した自意識が、自然へ復帰するためには、どれほどの時間と苦難を必要とするかという、近代思想の極めて重要な一節が、ここに提示されたのである。病気が、これを異常に拡大して、氏の負担たらしめたと云っている。驚くべき素直な、一種稚拙な素質が、これを真正面から受け入れた故に悲痛な戦いとなったのである。

「当為癖」、これは求信者の避け難い道程であり、「眠られぬ」ことは、観察を事とする芸術家の運命と云つてよい。倉田氏は決して聡明多才な人ではない。愚に迷い、拙くつまずきながら、あちこちと彷徨さまよっている実にぎこ

ちない文体が、つみかさなつて、一種の重量感と逞しさをもたらしていることを私は感銘する。云わばその「無智」の尊さを。

青年時代の、不治と宣言された結核が、「出家とその弟子」を生み、中年期の、恐るべき強迫観念、不眠症が、「絶対的生活」を生んだ。だがそこからの恢癒とは、何を意味したであろうか。「生活と一枚の宗教」などを讀むと、氏の恢復はまさに奇蹟の感を与える。肺結核、腰髓カリエス、肋骨カリエス三カ所。左腕結核性関節炎、結核性辜丸炎。結核性中耳炎、結核性痔瘻、喀血はむろ

ん、「出家とその弟子」を書いた翌年からはもう日常病臥の身となり、原稿も仰臥してかくか口述筆記であつた。身体にも腕にもコルセットをはめて、この状態が十三年間もつづいたのである。それが「生活と一枚の宗教」をかきあげた頃から、全く快癒し、徹夜の執筆も水泳も三里半位の山道を越えるのも平気となり、しかも疲れを殆んど感じなくなつたという。まさに奇蹟といつていい。「私は病気を治したわけではなく、病気を顧みなくなつたことによつて、病気であろうがあるまいが、已むを得ないことは已むを得ないこととして受け容れ、これを純

一に忍受することによって、おしまいには病気のごとは考えない。考えていられないように生きることによって、いつしか病気を忘れてしまったのです。」

これが氏自身の転身の告白である。青春の第二の誕生日につぐ第三の誕生日と云ってよい。強迫観念と不眠の地獄から得た「救い」であった。後年の氏は、まさにこのとおり健康を恢復して、旺盛な活動をつづけられたのである。そして多くの凡作をかいた。では、これはいかなる種類の救いであつたらうか。私はアイロニーを弄んでいるのではない。病気と切り離しては考えられぬ氏の

生涯と作品を思い、病気が一人間をかくも深めるものであるという、その「奇蹟」について驚きの念を禁じえないのである。

（昭和二十三年七月稿）



日本文学電子図書館

---

倉田百三

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 40  
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館